

不登校のこどもへの多様な支援 ー学びの多様化学校の必要性ー

鳴門育大学大学院心理臨床コース 吉井健治

2025年5月

1

目 次

1. 不登校のこどもへの多様な支援ー仮想事例を通してー（別紙参照）
2. 急増する不登校のこどもたち
3. 学びの多様化学校の必要性
4. 徳島県学びの多様化学校の構想ー新しい学びのかたちの提案ー
 - ・ 特別の教育課程 「心の健康」「自己表現」「自然体験」
 - ・ 不登校に配慮した学校システム
5. 徳島県教育委員会と鳴門教育大学の連携協力

2

1. 不登校の子どもへの多様な支援－仮想事例を通して－(別紙参照)

時期【場所】	状態像	アセスメント	多様な支援
小5、小6	友人関係トラブル、いじめ被害、不登校	発達特性、対人コミュニケーションの問題	担任、SC、SSW
中1【教室】	周囲の視線を怖がる	いじめによるPTSD	担任、教育相談コーディネーター、SC
【校内】	週に1、2回の登校	自尊心の低下	校内教育支援センター
【校外】	全く登校しなくなった	うつ状態	教育支援センター
【自宅】	外出を嫌がる。昼夜逆転。	引きこもり傾向。うつ傾向。社交不安傾向。	医療機関、専門相談機関、ライフサポーター
中2【地域】	フリースクールの子どもたちとの交流を楽しむ。	チャム関係の形成(孤独感が和らぐ)	フリースクール
【学習塾】	勉強をするようになった	元の学校への復帰は困難	個別指導の学習塾
中3【新しい学校】	学ぶ喜び、人と関わる喜び。将来への希望。	心の栄養「自信」「希望」「仲間」を得た。	学びの多様化学校

3

2. 急増する不登校の子どもたち

〔急増の背景要因〕

- ① 登校意識…欠席に寛容、適時適量の登校刺激の不足、再登校援助の不足、等
- ② 学校魅力…学ぶ喜びや人と関わる楽しさが得られないこと、等
- ③ パーソナリティ…欲求不満耐性の低下、ストレス対処法の未学習、等
- ④ 対人関係…友人関係の希薄化、対人コミュニケーション力の低下、等

〔不登校の様々なタイプ〕

- ・ 不登校の原因は1つではなく、様々な要因が絡み合っている。
- ・ BPS(生物心理社会モデル)を考慮したアセスメントを行い、個に応じた対応が必要である。

4

3. 学びの多様化学校の必要性

【学びの多様化学校の経緯】

- COCOLOプラン(文部科学省、2023)
- 2023年(R5)年度24校 → 2024(R6)年度35校 → 2025(R7)年度58校

【学びの多様化学校の必要性】

- ① 不登校の子どもへの多様な支援はある程度行われているが、「“学校”に通いたい」「“学校”で学びたい」というこどものニーズには応えられていない。“新しい学校”が求められている。
- ② 不登校の子どもを対象とした“新しい学校”を通して「特別的教育課程」「学校システム」の研究開発を行い、この成果を一般校に展開し、不登校予防(とくに発達支持的生徒指導の側面)に貢献する。

5

4. 徳島県学びの多様化学校の構想ー新しい学びのかたちの提案ー

【特別的教育課程】「心の健康」入学した生徒は、様々な現実の困難に直面して自信を失ったり人への不信感をもったりなど心理的傷つきを抱えている。こうした挫折感の一方で未来への希望を感じている。そこで本科目では、臨床心理学に基づいた心理教育的アプローチにより生徒の心理的回復及び心理的成長を促す。

自己	対人関係	セルフコントロール
・ 自己理解 ・ 自尊心 ・ レジリエンス ・ ストレス対処法	・ 他者理解 ・ 相互依存 ・ コミュニケーション ・ ソーシャルスキル	・ 感情を調える ・ 認知を調える ・ 行動を調える ・ 意味を探求する

6

【特別の教育課程】「自己表現」生徒は、自分を過剰に抑制し、学校になじめなくなった。そこで本科目では、まず生徒が抑えてきた気持ちを表現し、次に生徒が自分の良さや特質に気づき適切に表現する。こうしたありのままの自己表現を通して、自尊心が高まり、対人関係能力が獲得され、現実(学校、社会)と交流できるようになる。

臨床心理学的側面	教科的側面	生き方
・ エンカウンター・グループ ・ 対話の場 ・ 表現療法体験	・ アート(音楽、美術) ・ 体ほぐし(体育) ・ 匠の技(技術) ・ 料理作り(家庭)	・ ライフプランニング教育 ・ 地域の文化(お遍路、伝統工芸、等)

7

【特別の教育課程】「自然体験」不登校の子どもに自然体験活動が及ぼす効果について研究が進んでいる。また、臨床心理学と野外教育が結びついて、個人の心理的成長や集団の発展を促す実践的研究も行われている。○池田・吉井, 他(1992). 不登校生徒の合宿体験 名古屋大学教育学部紀要, 39, 45-61. ○岡本, 他(2011). 自然体験活動が不登校経験者の発達に及ぼす影響と意味づけ 広島大学心理学研究, 11, 189-199. ○日本野外教育学会(2022). 政策提言 野外教育を通じて子供の育ちを支える 日本野外教育学会

自然との交流	危機対応	育てる
・ 野外活動 ・ 登山 ・ 山の知識検定	・ 防災の学習 ・ 避難生活のスキル	・ 農業 ・ 園芸 ・ 生物とのふれあい

8

〔不登校に配慮した学校システム〕

■ 生徒について

【定 員】 中学1年生20人、中学2年生20人、中学3年生20人、計60人。

【クラス編成】 1クラス15人の4クラスとする(異学年編成)。生徒の不登校歴や学力は様々なので、学年別のクラスでなくてもよい。定期的に(年3回)クラス分けを行う。

【入学の条件】 不登校経験者。書類審査、面接、等を実施する。

■ 教職員について

【教 員】 不登校支援において優れた経験をもつ教員、等。

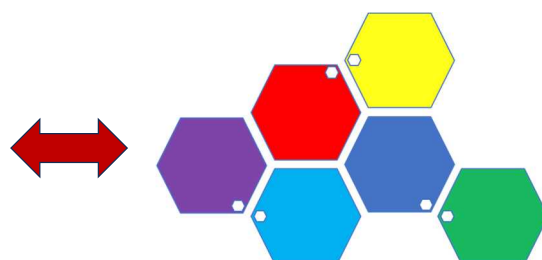
【スクールカウンセラー】 公認心理師の有資格者。常勤1名、非常勤(週2、3日) 2名。

9

5. 徳島県教育委員会と鳴門教育大学の連携協力

	鳴門教育大学〇〇センター
1	特別の教育課程
2	不登校に配慮した学校システム
3	教員養成、教員研修の教育実習
4	臨床心理士・公認心理師養成の心理実習
5	常勤型スクールカウンセラーの活用
6	ひきこもり傾向の不登校への訪問支援
7	オンラインによる支援
8	不登校の子どもをもつ保護者への支援

徳島県学びの多様化学校



★国立の教育大学と連携した
日本初の学びの多様化学校

10

不登校のこどもへの多様な支援－仮想事例を通して－

学年	状態像	アセスメント	対 応
小5 小6	・ Aは、友人関係トラブルが続き、いじめられ、学校に行きにくかった。 ・ いじめ重大事態（不登校）と認定された。	・ Aは、衝動的で、人に合わせるのが苦手で、被害的に感じる性質があった。 ・ 対人コミュニケーションに困難があった。	・ 学校では担任、<u>SC</u>、<u>SSW</u>がAと保護者に関わった。 ・ <u>専門相談機関</u>に継続的に通った（プレイセラピー、カウンセリング）。
中1 教室	・ 5月頃から教室に入りにくくなった。周りの生徒の視線や表情、笑い声を怖がるようになった。 ・ 朝、起きられず、体調不良のため学校を休む日が増えていった。	・ 被害感が高まり、人と交流するのを回避した（いじめによる PTSD）。 ・ 内科を受診したが、とくに問題はなかった。	・ 保護者は、担任、<u>教育相談コーディネーター</u>、<u>SC</u>に相談した。
校内	・ 6月頃から週に1、2日しか登校しなくなった。 ・ 笑顔がなくなり、意欲がなくなってきた。	・ 自尊心の低下（いじめによる PTSD）。	・ 教室に入れなくなったので、<u>校内教育支援センター</u>で過ごした。
校外	・ 9月頃から全く登校しなくなった。 ・ 勉強を嫌がった。 ・ 担任と会えなくなった。	・ うつ状態	・ 学校に登校できなくなり、<u>教育支援センター（適応指導教室）</u>で過ごした。
自宅	・ 12月頃から外出を嫌がるようになった。教育支援センターにも行けなくなった。 ・ ゲームに没頭し、昼夜逆転になり、怠惰な生活になった。	・ 引きこもり傾向 ・ うつ傾向 ・ 社交不安傾向 ・ 薬物療法	・ <u>医療機関</u>を受診。 ・ <u>専門相談機関</u>で保護者のカウンセリング。 ・ <u>ライフサポーター</u>に家庭訪問してもらい交流した。
中2 地域	・ 4月頃から少しずつ外出できるようになった。 ・ フリースクールの子供達と交流し、笑顔が見られ、活動を楽しめるようになった。	・ チャム関係の形成（孤独感が和らぐ） ・ 心の傷つきからの回復 ・ 意欲の向上	・ <u>フリースクール</u>に通った。
塾	・ 11月頃から勉強をするようになった。 ・ 学校に通いたいと思うようになった。しかし、元の学校でやっていく自信はなかった。	・ これまでの学校にはトラウマがあって、学校復帰は容易ではなかった。 ・ 心機一転	・ <u>個別指導の塾</u>に通った。
中3 多 様 化 学 校	・ Aは、多様化学校の新しい授業「心の健康」を通して、自己理解、他者理解、対人コミュニケーションの力を習得できた。 ・ 学習の喜び、人と関わる喜びを感じるようになった。 ・ 将来への希望がわいて、学習意欲が高まった。	・ 心の栄養である“自信、希望、仲間”を得ることができた。 ・ 多様化学校の特別の教育課程、配慮あるシステム、教職員の関わりなどがAの成長に効果的だった。	・ <u>学びの多様化学校</u>に転校した。 ・ 卒業まで継続的に登校した。